えたいメッセージと短いストーリーをどうやって両立させるか、そのために自分で何ができるか考えます。

Q気分転換は？

――柔軟程度ですが、筋肉を使わないと落ち着かないんです。休日はジムに行ったり水泳に行ったり。最近はピラティスを楽しんでいます。

Q最近気になるアートは？

――日本画。絵画は海外のものばかり見ていたのですが知人に誘われていった酒井抱一の美術展で感動しました。草や野花を慈しむ姿勢がすてきだなと。色使いも繊細ですよね。

クロスボーダーレビュー
REVIEW

美術家

森村泰昌が見た映画

「ブリューゲルの動く絵」

「ブリューゲルの動く絵」は、ブリューゲル作、「十字架を担うキリスト」の映画化である。かつて、レンブラントやゴヤといった画家についての映画はあったが、それらとは趣（おもむ）きが異なる。というのも本作は画家の伝記物ではなく、絵画それ自体を映画化した作品だからである。邦題にあるように、静止した絵画を動かすとどうなるかを試みた映画なのである。

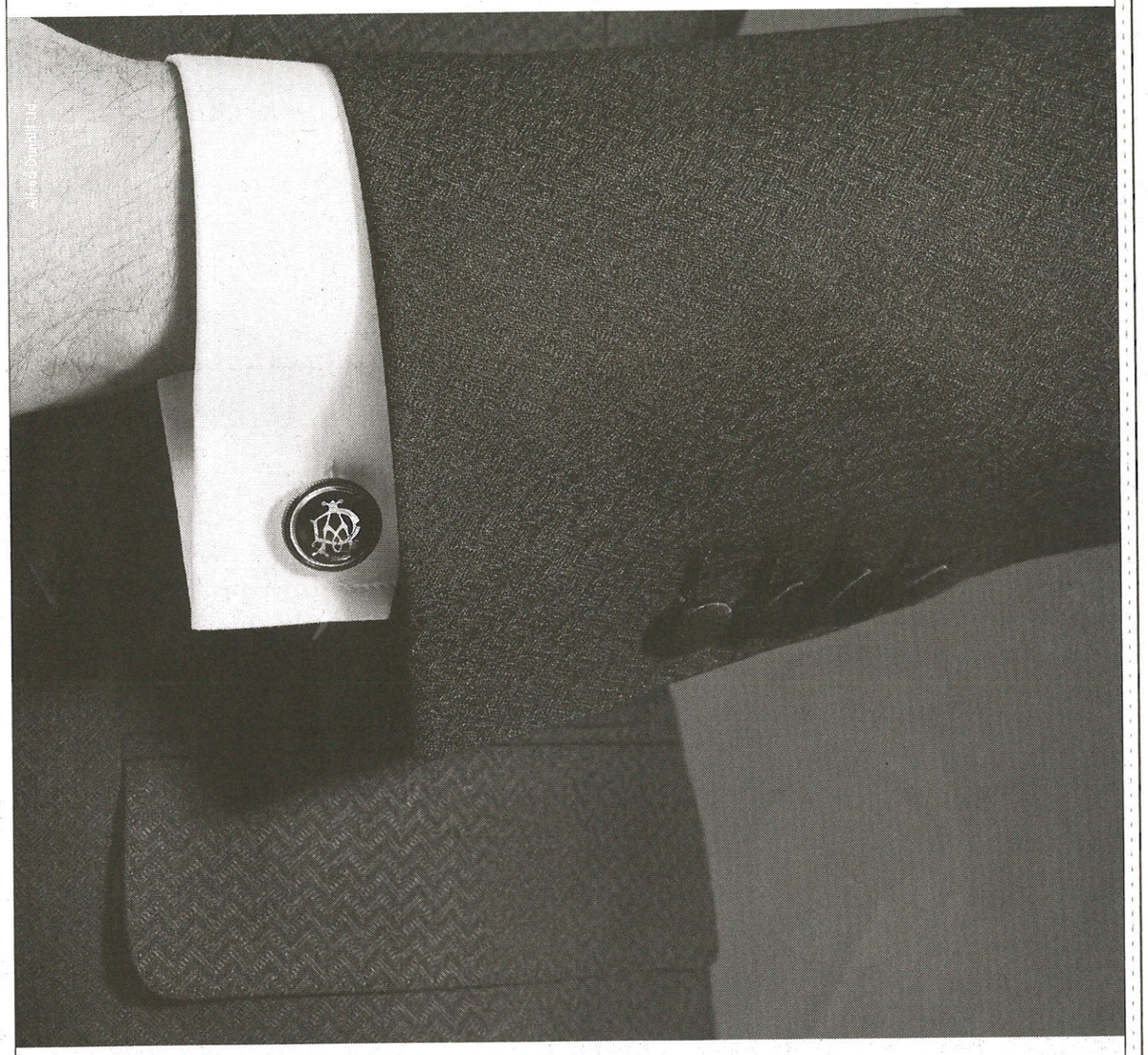
これをはたして、「映画」と呼んでいいものだろうか。むしろ美術作品ととらえるべきではないのか。映画であろうと美術であろうと、おもしろければそれでいいとも言えるが、美術家の私は、映画と美術の狭間に立ってあれこれ考えるという愉（たの）しみを捨てきれない。

一般的に、映画は小説に近い。共に、時系列に添って物語が展開する、いわゆる時間芸術である。絵画は違う。瞬時に全貌が鑑賞者の眼前に現れる。極論すれば、絵画鑑賞には30秒もあれば十分である。映画のように、90分なり2時間なりを要するという時間の枷（かせ）はない。

とは言え、絵画中に物語や時間の流れがないかといえば、そんなことはない。鑑賞者は想像力をたくましくして、たった一枚の絵からその前後に展開するストーリーを自由に紡ぎ出すことができる。この時、静止画像であったはずの絵画は、想像世界の中で動画化する。凍結した画像としての絵画に時間が注がれて、人も動物も雲も木々も活き活きと息を吹き返す。この静から動への想像力を、実際に目に見える形に仕立てあげたところに、本作ならではの感動がある。

素直に捉えるなら、本作は絵画（静止画）の映画化（動画化）である。だが見方を変えて、絵画を観る際に鑑賞者側に生まれる絵画的想像世界の具現化であると捉えるなら、本作は絵画の映画化というより、映画によって描かれた絵画、あるいは絵画と化した映画であると見えてくる。

絵画が映画になったのではない。映画が絵画になったのだ。美術家の私はそうとらえ、この絵画のような映画、いや映画のような絵画を愉しんだのであった。



センチュリーマン カフリンクス

ジェントルマンとは、最高に着こなしが粋でありながら、
その着こなしを誰も気付かない人だと考える
アンソニー・トロロープ ― 小説家

Polished stainless steel and lacquer
with swivel finding

dunhill.com

dunhill
LONDON